# 小谷Ａ遺跡（第２次）発掘調査報告

－三重県松阪市嬉野天花寺町所在－

２０１０（平成２２）年３月

三重県埋蔵文化財センター

小谷 A 遺跡調査区全景　（西から）

# 序

布引山系に源を発し、三重県の中央部を横断する雲出川の流域は、県内でもいちはやく弥生文化の伝わった地域として知られています。小谷Ａ遺跡は、雲出川の支流である中村川左岸にある、天花寺丘陵の裾に立地しています。天花寺丘陵上には、これまでの埋蔵文化財調査で、縄文時代から近世にかけての大規模な複合遺跡があることが確認されています。

今回の発掘調査は、主要地方道松阪一志線の整備に伴って行われたもので、開発に伴う緊急調査です。我々が現代社会をより豊かに暮らすためには、開発は必要不可欠なものです。その一方で地域の歴史を語る遺跡が失われていくにあたり、これらを記録保存し、後世に伝えていくのも我々の使命であると考えております。今後は、こうして蓄積された成果をより多くの人々に有効に活用されるように努力していきたいと考えております。

なお、最後になりましたが、調査にあたりましては地元の方々をはじめ、松阪市教育委員会、三重県県土整備部には多大なるご理解とご協力を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

平成２２年３月

三重県埋蔵文化財センター
所長　河北　秀実

# 例　　言

１．　本書は、三重県松阪市嬉野天花寺町に位置する、小谷Ａ遺跡の第２次発掘調査報告書である。

２．　調査の原因は、平成20年度の主要地方道松阪一志線道路改築事業である。当該調査にかかる費用は、三重県県土整備部が負担した。

３．　当該調査及び整理体制は下記のとおりである。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ｉ課　主査　西村美幸、臨時技術補助員　川崎志乃

整理担当　　三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ｉ課・情報普及課・支援研究課（平成20年度）

調査研究Ｉ課・活用支援課（平成21年度）

発掘調査業務委託先　　株式会社アート（土工委託）

４．　調査期間及び面積は下記のとおりである。

平成20年６月30日　～　平成20年８月25日　389㎡

５．　調査にあたっては、地元の方々、松阪市教育委員会、三重県県土整備部道路整備室、及び松阪建設事務所、からご協力を得た。

６．　報告書の編修・執筆及び遺物写真撮影は西村が行なった。

７．　本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

# 凡　例

＜**地図類**＞

1　本書で使用した地図類は、国土地理院発行の 1/25,000 地形図、主要地方道松阪一志線道路改築事業の工事図面、松阪市作成の 1/2,500 都市計画図である。工事図面類は、国土調査法の日本測地系による座標（旧国土座標）で表現されているものであるため、平成 14 年４月から施行されている世界測地系・測地成果 2000 には対応していない。

2　挿図の方位は、世界測地系・測地成果 2000 による座標北で表している。なお、この地域の磁北は真北に対して６°40′西偏している。（平成 11 年国土地理院）

＜**遺構類**＞

1　土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』（第９版 1989 年）を用いた。

2　本書で使用した遺構表示略号は下記のとおりである。

ＳＸ：墓　ＳＤ：溝　ＳＫ：土坑　Ｐｉｔ・Ｐ：柱穴・小穴

3　柱穴の「掘形」とは、柱を据えるために掘削した穴のラインを指す。

＜**遺物類**＞

1　当報告での遺物実測図類は実物の１/４を基本としている。

2　遺物実測図は、当報告書を通じて通番としている。

3　当報告書での用語は、「つき」は「杯」、「わん」は「椀」に統一している。

4　出土遺物観察表は、以下の要領で記載している。

番号 ･････････････････ 出土遺物実測図掲載番号である。

実測番号 ･････････････ 実測段階の登録番号である。

様・質 ･･････････････ 「弥生土器」「土師器」などの区分をここに示した。

器種など ･････････････ 遺物の器種を示した。

グリッド ･････････････ 調査時に設定したグリッド名を記した。

遺構・層名等 ････････ 遺物の出土した遺構や層名などを記した。

大きさ（cm） ････････ 遺物の大きさを示す。（口）は口縁部径、（底）は底部径、（高台）は高台部径、（高）は器高を示す。なお、数値はそれぞれの部位の最大径であり、内法や、実測段階での接地点ではない。

調整・技法の特徴 ････ 主な特徴を示した。「Ａ→Ｂ」はＡの後にＢが施されたことを示す。

胎土 ･････････････････ 小石などの混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で区分した。

色調 ･････････････････ その遺物の代表となる色調を記載した。表記は前掲『新版標準土色帖』に拠る。

残存度 ･･････････････ その部位を 12 分割した際の残存度を示した。6/12 は約半分を示す。

特記事項 ･････････････ 遺物の特徴となる事項を記した。

＜**写真図版**＞

1　写真図版は、遺構・遺物毎でまとめた。

2　出土遺物実測図と写真図版の遺物番号は対応している。

3　遺物の写真図版は、縮尺不同である。

# 本　文　目　次

第１章　前　言
１　調査に至る経緯 …… １
２　調査経過 …… １
３　文化財保護法にかかる諸通知 …… １
４　調査の方法 …… １
第２章　位置と環境
１　地理的環境 …… ２
２　歴史的環境 …… ２
第３章　遺　構
１　基本層序 …… ６
２　遺構の概要 …… ６
第４章　遺　物
１　方形周溝墓出土の遺物 …… １３
２　その他の遺構出土の遺物 …… １３
３　小穴出土の遺物 …… １５
４　包含層出土の遺物 …… １５
第５章　調査のまとめ
１　方形周溝墓の特徴について …… １７
２　小谷Ａ遺跡の位置づけ …… １８

# 図　版　目　次

第１図　遺跡位置図 …… ３
第２図　周辺の発掘調査箇所 …… ４
第３図　調査区位置図 …… ５
第４図　遺構平面図・土層断面図 …… ７・８
第５図　ＳX11・12 実測図 …… ９
第６図　ＳX14・15 実測図、ＳX14 遺物出土状況図 …… １０
第７図　ＳX16 実測図、ＳX16 遺物出土状況図 …… １１
第８図　出土遺物実測図（１） …… １４
第９図　出土遺物実測図（２） …… １５
第10図　方形周溝墓配置図 …… １７

# 表　目　次

第１表　　遺構一覧表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１２
第２表　　出土遺物観察表　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６

# 写　真　図　版　目　次

巻頭写真図版　小谷Ａ遺跡調査区全景
写真図版１　　調査前風景　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２１
写真図版２　　調査区全景　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２２
写真図版３　　ＳＸ11・12、ＳＸ14　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２３
写真図版４　　ＳＸ15、ＳＸ16　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２４
写真図版５　　土器５・９出土状況、土器５出土状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２５
写真図版６　　土器６・７出土状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２６
写真図版７　　土器８出土状況、土器13出土状況　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２７
写真図版８　　調査区土層断面　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２８
写真図版９　　出土遺物（１）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２９
写真図版10　　出土遺物（２）　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０

# 第１章　前　言

## １　調査に至る経緯

小谷Ａ遺跡は、旧一志郡嬉野町の遺跡台帳で 91 番として登録され、平成 18 年に松阪市に合併した際に旧嬉野町の整理番号ｂが付されｂ91 番となった。

当遺跡は、平成 13 年度に実施された県道（主要地方道）松阪一志線緊急地方道路整備工事に先がけて、掘削される部分 600 ㎡を対象に、８月 23 日～１月18 日に発掘調査が行なわれた。（第１次調査）

その後、平成 19 年 12 月 11 日に、県道（主要地方道）松阪一志線道路改築事業に先がけ、小谷Ａ遺跡とその西側の事業対象地 800 ㎡について範囲確認調査を実施（第３図調査坑５～11）した結果、遺跡が西側に広がっていることが判明し、要本調査範囲 400 ㎡を確定した。

## ２　調査経過

本調査は、平成 20 年度に株式会社アートに土工部門の委託を行って実施した。事業委託期間は、６月 30 日～８月 25 日であった。現地調査は７月７日から開始し、８月 14 日に終了した。当該事業地がＪＲに近接し、現地での説明会を行うことが困難であったため、調査終了後、９月 20 日（土）に地元自治会向け、９月 23 日（祝・火）に県民全体向けのスライドによる説明会を開催し、合計 34 名の参加者を得た。

なお、平成 21 年３月 10 日に本調査箇所の北側の範囲確認調査を実施した（第３図調査坑１～４）。調査の結果、この部分では土師器小片が見つかったのみで、遺構は確認されなかった。

## ３　文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第 48 条第１項（県教育長宛）
　平成 20 年４月７日付け松建第 34 号
・文化財保護法第 99 条の第１項（県教育長宛）
　平成 20 年７月３日付け教埋第 151 号
・　遺失物法による文化財発見・届出通知（松阪警察署長宛）
　平成 20 年９月 17 日付け教委第 12－4411 号

## ４　調査の方法

**調査区の設定**　調査範囲（調査区）内の任意の２点を結ぶ線を基準線とし、それにしたがって 4m×4m の方眼（グリッド）を設定し、調査の基本単位とした。グリッド名の表記は、北西隅を表示の原点とした。その後、遺構実測の段階で、国土座標（新座標）を付与し、調査区全体の位置関係を座標で把握できるようにした。

**表土除去**　調査前の状況は林であった。立木はチェーンソー等で伐採し、包含層より上は、重機（バックフォー）による表土除去を実施した。立木の根は、重機で起こすと遺構面を破壊するおそれがあったため、人力により少しずつ掘削した。

**検出・掘削**　表土除去後、人力による遺物包含層掘削を実施し、その後、遺構検出・遺構掘削を行った。

**遺構略図**　遺構検出時等、遺構が確認された場合には、グリッド単位で 1/40 の遺構略図を記録した。ここには、埋土の状況・遺構の重複関係を記したほか、遺物取り上げにおける遺構番号の台帳としても使用した。

**遺構番号の付与**　遺構番号付与は、小穴以外は遺構種別を超えた通し番号とした。第２次調査では、11 番からスタートし、第１次調査の番号との重複を避けた。また、小穴の番号については、遺物の出土した小穴のみを対象とし、グリッドごとに通し番号を付与した。

**実測**　調査区の土層断面図は、1/20 縮尺で実測を行った。遺物出土状況や個別遺構の実測図・断面図は 1/10 もしくは 1/20 縮尺で実測を行った。調査区全体の遺構実測も手描きとし、1/20 縮尺の作図とした。

**遺構写真撮影**　基本的に４×５インチ判の白黒ネガ・カラーリバーサルフィルムで撮影し、補助・メモ的に 35mm 判の白黒ネガおよびカラーリバーサルフィルムも使用した。

**遺物写真撮影**　報告書掲載遺物から任意に選択し、４×５インチ判及びブローニー判の白黒ネガフィルムで撮影した。　（西村美幸）

# 第２章　位置と環境

## １　地理的環境

小谷Ａ遺跡(１)は、松阪市嬉野天花寺町にある遺跡である。当該地は津市一志町との境の、通称「小鳥山」山塊から東方へ派生する天花寺丘陵の北端部にある標高 17～18mの平坦面に位置する。天花寺丘陵の北には雲出川が東に向かって流れ、南東には中村川が北東に向かって流れている。この２河川は天花寺丘陵の北東約 1.5～2.0km で合流する。

雲出川をさかのぼると、旧伊賀国や旧大和国に至る。旧一志郡付近はこれらの地域と旧伊勢国をつなぐ交通の要衝であった。

## ２　歴史的環境

小谷Ａ遺跡のある旧一志郡付近は、先に述べたように交通の要衝であり、古くから多くの遺跡が確認されている。天花寺丘陵周辺の雲出川中流域から中村川下流域及び丘陵周辺の詳細な歴史的環境については、三重県埋蔵文化財センター発行の『天花寺丘陵内遺跡発掘調査報告』のⅠ～Ⅶに詳述されており[①]、これらを参照されたい。ここでは、特に小谷Ａ遺跡と関連の深い天花寺丘陵周辺の様相を中心に概略を述べたい。

### （１）小谷Ａ遺跡

小谷Ａ遺跡の第１次調査は、平成 14 年度に県道（主要地方道）松阪一志線緊急地方道路整備工事に先がけ、掘削される部分 600 ㎡が調査された。調査箇所は、今回の第２次調査箇所から 100mほど東に位置する。調査の結果、明確な遺構は確認されず、当該箇所は旧流路であったと考えられた。また、遺物は、縄文時代晩期の深鉢とサヌカイトの剥片が数点出土しているが、丘陵部からの流れ込みであると判断された[②]。

### （２）周辺の遺跡

**旧石器・縄文時代**　旧石器時代から縄文時代草創期には、清水谷遺跡（２）と小谷赤坂遺跡（３）で有茎尖頭器が確認されている。縄文時代早期には、馬ノ瀬遺跡（４）で陥穴状遺構や押型文土器が確認されている[③]。小谷赤坂遺跡でも遺物が散在するが、遺構は確認されていない。後期には、清水谷遺跡で土器が少量確認されている。晩期は前述の小谷Ａ遺跡第１次調査の結果から、周囲にこの時期の遺跡があったことがうかがえる。

**弥生時代**　前期には、小谷赤坂遺跡で竪穴住居、土坑が確認されている。

中期には、馬ノ瀬遺跡で竪穴住居が確認されている。また、天花寺丘陵の北にある片野遺跡[④]（５）や、中村川の対岸にある下之庄東方遺跡[⑤]（６）で方形周溝墓群が確認さている。

後期前半には、小谷赤坂遺跡及び清水谷遺跡で環濠を持つ大規模な集落が確認されている。この集落は、後期後半に突然廃絶している。後期後半の遺構・遺物は、近隣ではほとんど確認されていないが、片野遺跡付近か天花寺北瀬古遺跡（７）付近に存在する可能性が示唆されている[⑥]。下之庄東方遺跡では、中期から引き続いて後期後半まで方形周溝墓が築かれている。大型のものも出現し、掘立柱建物も確認されている。天花寺丘陵の南東 3.5km にある田村西瀬古遺跡（８）でも方形周溝墓が確認されている[⑦]。

**古墳時代**　前期前半の遺構・遺物は明確ではない。前期後半には、堀田遺跡（９）の旧流路から木製品を含む多くの遺物が出土しており、「マツリ」の場として機能していた可能性が示唆されている[⑧]。小谷赤坂遺跡の第１次調査では、この時代の遺物が出土しており、墳墓が形成されていた可能性がある。また、西野古墳群（10）、筒野１号墳（11）が形成される[⑨]。

中期の集落跡は明確ではないが、天花寺北瀬古遺跡と堀田遺跡からはこの時期の遺物が出土しており、近隣に集落があった可能性が示唆されている。墳墓は、赤坂古墳群（12）と小谷古墳群（13）が中期末葉から形成されはじめる。小谷 13 号墳は、三角板鋲留短甲（さんかくばんびょうどめたんこう）や武具、玉類など豊富な副葬品を伴い、有力者の墓であることが想定されている。

後期の集落跡も明確ではないが、丘陵東麓の天花寺北瀬古遺跡からはこの時期の遺物や焼土坑が確認されており、近隣に集落があった可能性が示唆されている[⑩]。墳墓は、引き続き小谷古墳群が形成される。

木棺直葬を主体としたもので、6 世紀後半頃まで古墳の築造が行われる。丘陵西部の西野古墳群では、横穴式石室を主体とした古墳群が形成され、西野 5 号墳では、馬具が出土している[11]。

**古代**　飛鳥時代から奈良時代の遺跡に、天花寺廃寺（14）がある[12]。天花寺廃寺の北に位置する堀田遺跡では、多量の土器が確認され、郡衙関連の施設があったことが想定されている[13]。また、天花寺丘陵北東端付近には天花寺瓦窯跡（15）があり、瓦が確認されている。

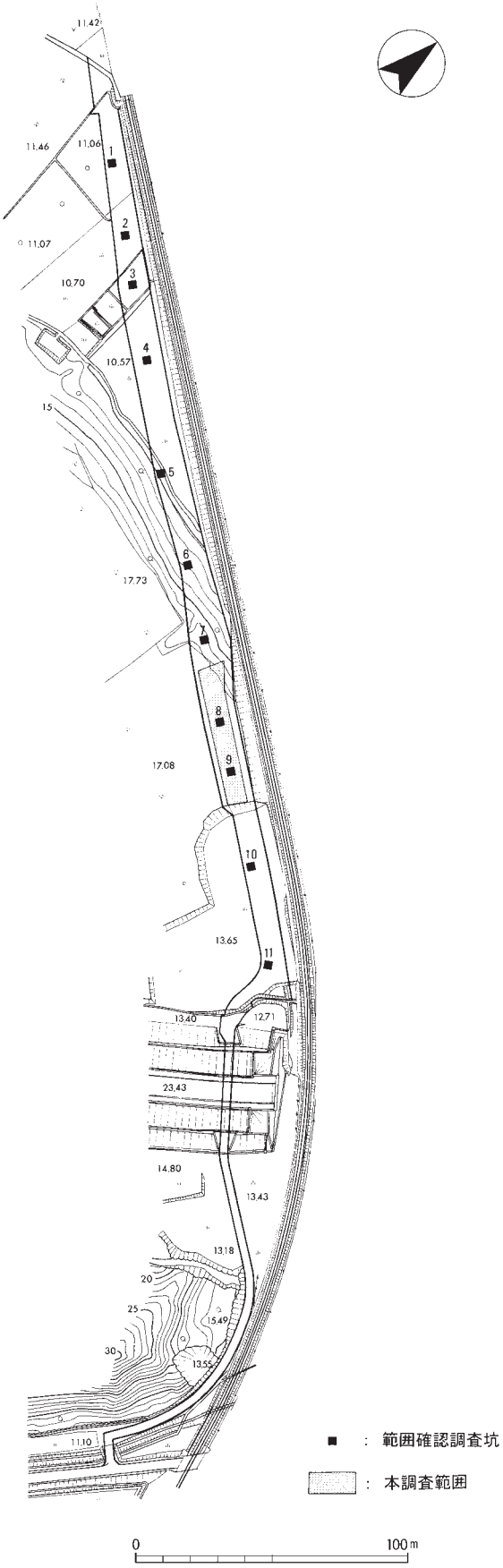
小谷赤坂遺跡では、奈良時代の竪穴住居、掘立柱建物、土器棺墓などが確認されている。平安時代には、遺構は少なく土器棺墓が確認される程度であるが、遺物は緑釉陶器なども出土している。

**中世・近世**　小谷赤坂遺跡では、13 世紀ごろから、土坑墓の形成が始まり、13 世紀後半には蔵骨器を伴う中世墓が形成され始め、次第に群をなしていく。中世墓は、16 世紀前半ごろまで継続すると考えられているが、それと併行して 15 世紀末ごろから天花寺城跡（16）の造成が始まる。

17 世紀後半頃に「天華寺」が創建される。当初は、東西 100m、南北 140m の小規模な土塁を伴った方形の境内を呈していたことが確認されている。18 世紀ごろには、境内南東部付近に礫石経を埋納した道が確認されている。　（西村美幸）

**第 1 図　遺跡位置図**　（1：50,000）［ 国土地理院「大仰」1：25,000 より作成 ］

第２図　　周辺の発掘調査箇所　（１：5,000）




第３図　　調査区位置図　（１：2,500）

〔註〕

① 『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1996 年、『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター　1997 年、『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ－１』三重県埋蔵文化財センター　2005 年、『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅲ－２』三重県埋蔵文化財センター　2002 年、『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター　2000 年、『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター　2000 年、『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』三重県埋蔵文化財センター　2005 年、『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅶ』三重県埋蔵文化財センター　2005 年

② 『堀田遺跡第 6 次調査』三重県埋蔵文化財センター　2005 年

③ 『天花寺山』一志町・嬉野町遺跡調査会　1991 年

④ 『片野遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1991 年、『片野遺跡発掘調査報告』一志町教育委員会　1986 年、『片野遺跡第三次発掘調査報告』一志町教育委員会　1989 年、『片野遺跡Ⅳ』一志町教育委員会　2002 年

⑤ 『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ　下之庄東方遺跡（高畑地区）』三重県教育委員会　1987 年、『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ　下之庄東方遺跡（小野・四反畑・夜ノ堀地区）』三重県教育委員会　1988 年、和氣清章「下之庄東方遺跡（前山地区）」『三重県史資料編考古１』三重県　2005 年

⑥ 『天花寺北瀬古遺跡（第１次）・薬師寺北浦遺跡発掘調査』三重県埋蔵文化財センター　1999 年

⑦ 『田村西瀬古遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999 年

⑧ 註②の文献

⑨ 註③の文献

⑩ 『天花寺北瀬古遺跡（第２次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　2001 年

⑪ 註③の文献

⑫ 『昭和 55 年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1981 年

⑬ 伊藤裕偉「ふたつの「こおりいち」～古代一志郡家に関する覚書～」『斎宮歴史博物館研究紀要 11』斎宮歴史博物館　2002 年

# 第３章　遺構

## １　基本層序

小谷Ａ遺跡は、丘陵端部の北向き緩斜面に立地している。畑地として利用されていたため、北西隅をのぞいてほぼ水平に削平されている。（旧土地所有者にお話しを伺ったところ、開墾時に土器が出たとのことである。）

基本層序は、表土直下に黄褐色から橙色系の粘土質シルトがあり、この層の上面を検出面としている。ただし、調査区北西部の傾斜地は、粘質土が流失したためか、下層の砂礫を多く含んだシルトを検出面としている。

## ２　遺構の概要

今回の第２次調査では、弥生時代後期前半の方形周溝墓６基、中世の溝、古墳時代の小穴等を確認した。方形周溝墓の主体部は削平されており、周溝と盛土の一部を確認したにとどまった。以下、主な遺構について概述するが、数値等は遺構一覧表を参照されたい[①]。

### （１）方形周溝墓

方形周溝墓４基を並んだ状態で確認した。うちＳＸ11・12 及びＳＸ14・15 はそれぞれ周溝を接し、直列状に配置されている。ＳＸ16 はほかの４基よりも大きく、形が台形に近くなる可能性がある。ＳＸ23 は、調査区東端の拡張部分で確認した。屈曲した溝の一部が確認できたのみであるが、埋土の状況の類似性から方形周溝墓と考えた。

**ＳＸ11**　調査区西端で確認した。周溝は、北辺と屈曲部を確認したのみで、大部分が調査区外に延びる。規模は東西 7.5m以上、南北は不明である。北辺の２ｍほど北は傾斜地になって下っている。東辺はＳＸ12 と接し、土坑状の落ち込みとなっている。遺構検出時にはＳＸ12 及び他遺構との前後関係の重複を想定して慎重に掘削を行ったが、重複の前後関係などを確認することができなかった。

**ＳＸ12**　ＳＸ11 と西辺を接して確認した。南辺は調査区の外に延び、確認できなかった。規模は東西 7.4～7.8m、南北 5.5m以上である。北辺の周溝内で 10 数点の小穴を確認した。いずれも周溝の埋土を掘削した後に確認したが、古代の土師器甕が出土した小穴もあり、周溝が埋まった後に掘られた小穴を確認できずに掘ってしまった可能性もある。

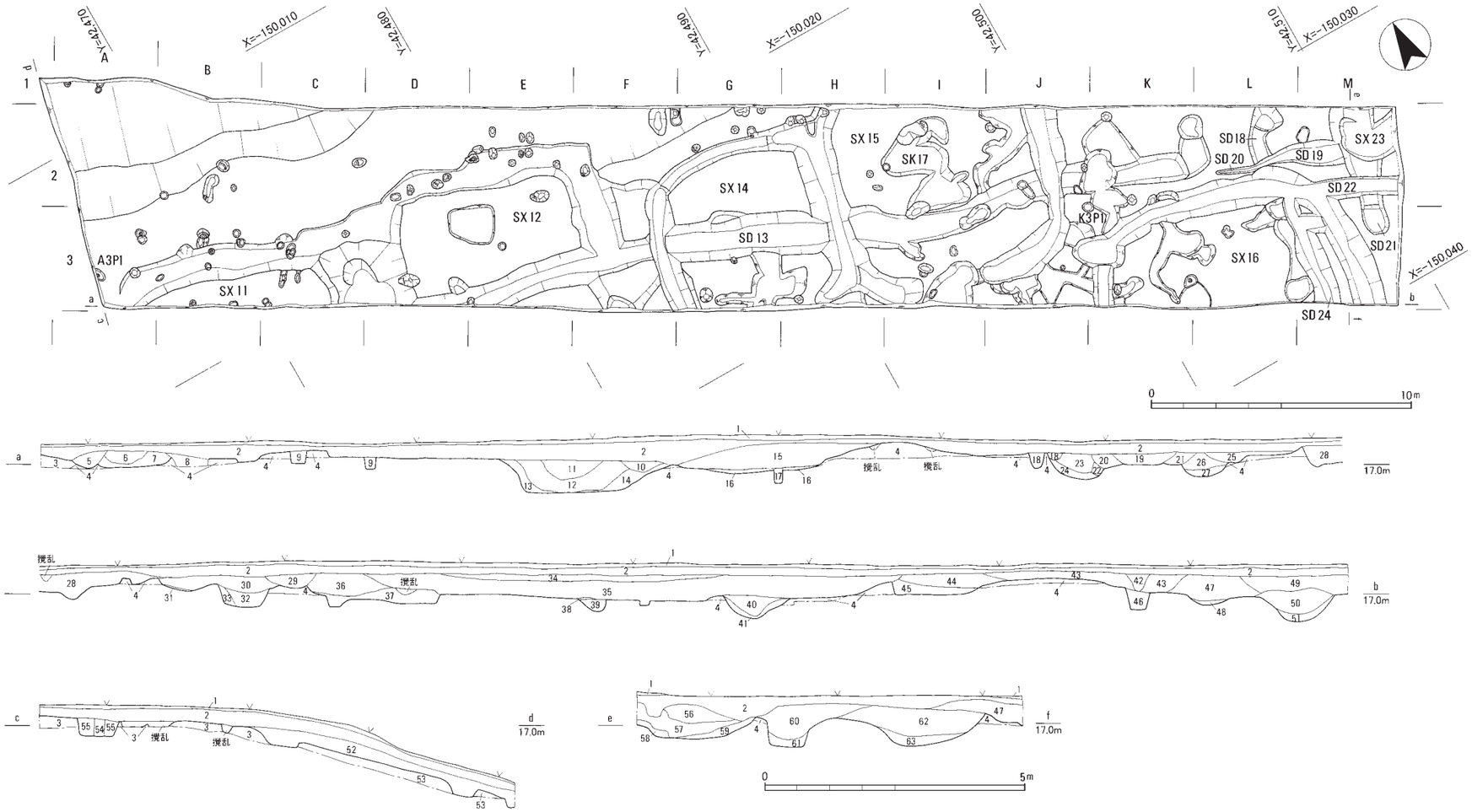
**ＳＸ11・12 間の落ち込み**　調査区南壁で土層を確認したところ、ＳＸ11 およびＳＸ12 の墳丘沿いに崩落土と考えられる土があり、その後埋まっていく様子が確認できた。この落ち込み部分は、方形周溝墓の築造当初から掘削されていたものである可能性が考えられる。この部分からの遺物出土は、弥生土器小片２点のみであった。

**ＳＸ14**　ＳＸ12 の１ｍほど東側で確認した。西辺の一部と南辺の一部は調査区外に延びる。規模は東西約 6.6m、南北 6.1m以上である。南辺は、確認された東辺からの屈曲部付近で急激に浅くなり、この先が切れて陸橋状となるものと考えられる。東辺はＳＸ15 と重複する。重複部分は検出時に南辺付近でＳＸ14 の埋土が上になっているのを確認したが、北辺付近では確認できなかった。築造順序は明らかにできなかったが、周溝は両方の墓で共有している可能性がある[②]。

北辺の東コーナーで、周溝中央部の底付近からほぼ完形の壺（５）が横倒しになった状態で出土した（第６図、写真図版５）。また、東辺のＳＤ13 と重複する箇所で、ほぼ完形の壺（６）、台付壺（７）を確認した。いずれも溝底から 30 ㎝ほど浮いた状態で、横倒しとなって出土した（写真図版６）。６は大きく２片に分かれていたものが接合した[③]。

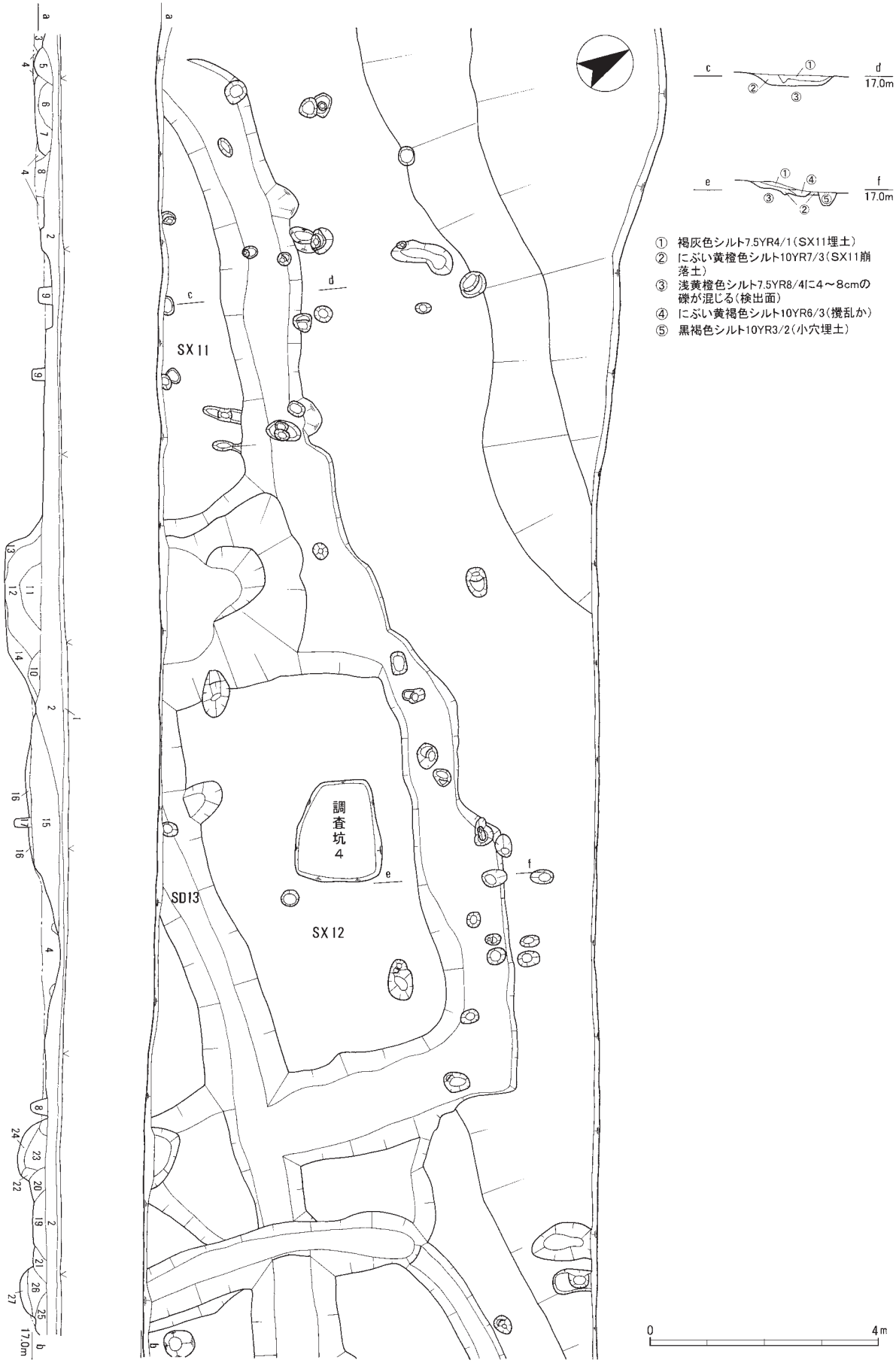
**ＳＸ15**　西辺をＳＸ14 と重複して確認した。北辺が調査区外に延びる。規模は東西約 7.9m、南北 7.0m以上である。南辺の中央部が切れ、陸橋となる。東辺のＳＤ13 と重複する箇所で、溝底から 30 ㎝ほど浮いた状態でほぼ完形に復元できる壺（８）を確認した。８は体部上半で接合痕に沿って割れ、体部下半はさらに細かく割れていた。口縁部から体部上半の破片は倒立した状態で確認した（写真図版７上）。

**ＳＸ16**　ＳＸ15 の南東で、一番狭いところで１ｍほど離れて確認した。東・西辺が調査区外に延び、南側は確認できない。規模は東西 9.5m以上、南北

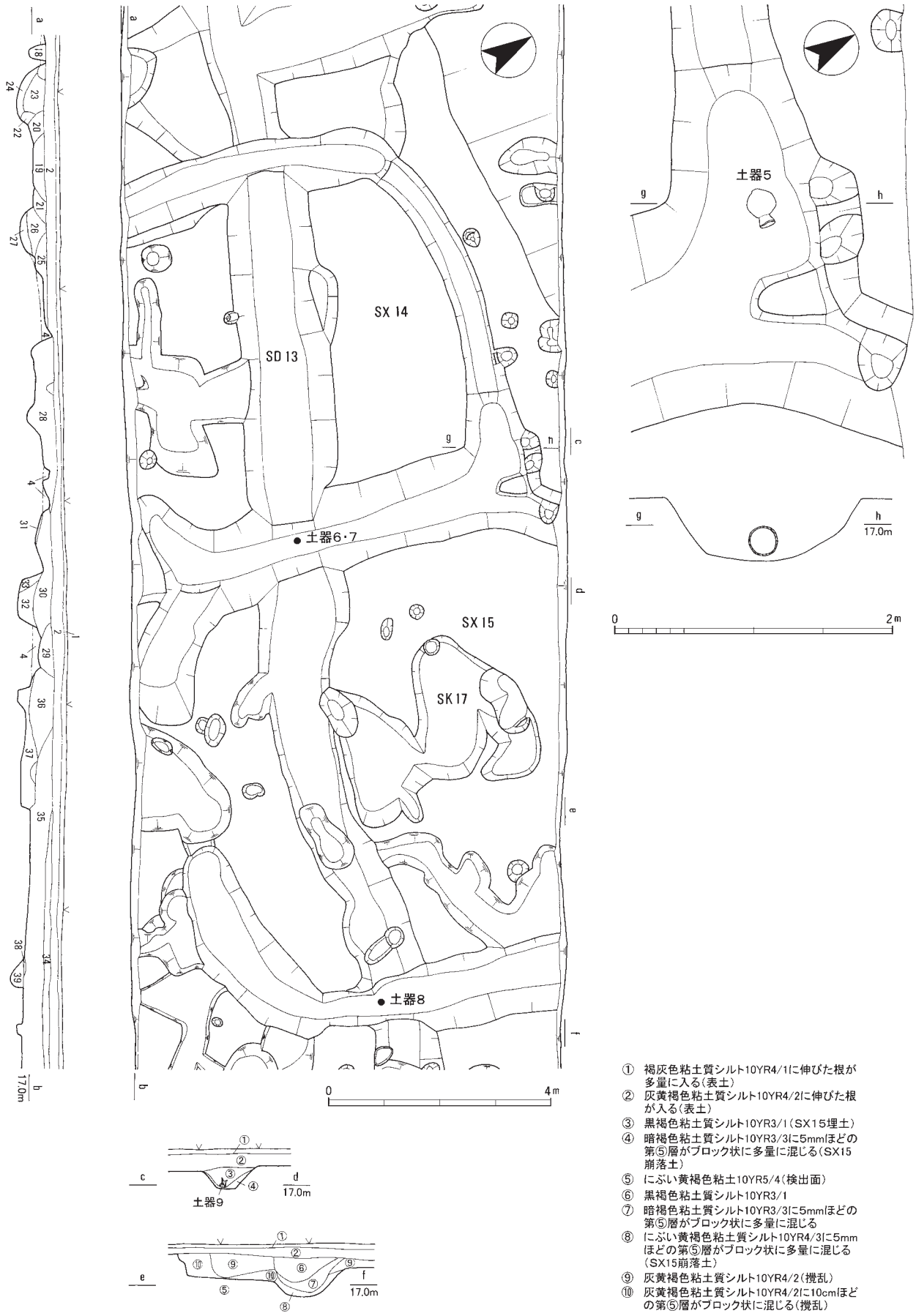



1　褐灰色粘土質シルト10YR4/1に伸びた根が大量に入る（表土）
2　灰黄褐色粘土質シルト10YR4/2に伸びた根が入る（表土）
3　にぶい黄褐色粘土10YR5/4（基盤層）
4　明黄褐色粘土質シルト10YR7/6,6/6（基盤層）
5　暗褐色土10YR3/3（撹乱か）
6　灰黄褐色土10YR4/2（SX11埋土）
7　灰黄褐色土10YR4/2に明黄褐色粘土質シルト10YR6/6が混じる（SX11崩落土）
8　にぶい黄褐色土10YR4/3（撹乱か）
9　灰黄褐色粘土質シルト10YR4/2に伸びた根が入る（小穴埋土）
10　黒褐色粘土質シルト10YR3/2（SX11・12埋土）
11　黒色粘土質シルト10YR2/1（SX11・12埋土）
12　黒褐色粘土質シルト10YR3/1に淡黄橙色粘土質シルト10YR8/4が2～3cmの塊状で混じる（SX11・12埋土）
13　黒褐色粘土質シルト10YR3/1とにぶい黄褐色シルト10YR5/3が斑状に混じる（SX11崩落土）
14　黒褐色粘土質シルト10YR3/1とにぶい黄褐色シルト10YR5/3が斑状に混じる（SX12崩落土）
15　灰黄褐色シルト10YR4/2（SD13埋土）
16　灰黄褐色シルト10YR4/2に第4層が2～3cmの塊で混じる（SD13埋土）
17　褐灰色シルト10YR5/1（小穴埋土）
18　黒褐色土10YR2/2に径5mmほどの明黄褐色粘土粒10YR6/6が混じる（撹乱か）
19　灰黄褐色シルト10YR4/2
20　灰褐色シルト10YR4/1
21　灰黄褐色シルト10YR4/2
22　黒褐色粘土質シルト10YR3/1に径3～5cmの淡黄橙色粘土ブロック10YR8/3が混じる（SX12埋土）
23　黒褐色粘土質シルト10YR3/1に径0.5mmのにぶい黄褐色粘土粒10YR7/2が少し混じる（SX12埋土）
24　灰黄褐色粘土質シルト10YR6/2に径0.5mmのにぶい黄褐色粘土粒10YR7/2が少し混じる（SX12崩落土）
25　灰黄褐色シルト10YR5/2
26　黒褐色粘土質シルト10YR3/2（SX14埋土）
27　黒褐色粘土質シルト10YR3/2に第4層が5～10cmのブロック状に混じる（SX14崩落土）
28　黒褐色粘土質シルト7.5YR3/1（撹乱か）
29　褐灰色粘土質シルト7.5YR4/1に第4層が粒状に少し混じる
30　黒褐色粘土質シルト10YR3/1
31　黒褐色粘土質シルト10YR3/2に第4層が5～10cmのブロック状に混じる（SX14崩落土）
32　灰黄褐色シルト10YR5/2
33　灰黄褐色シルト10YR5/2に第4層が10cmほどの塊で混じる
34　第2層に5mmほどのにぶい黄褐色シルト粒10YR6/3が多く混じる
35　褐灰色粘土質シルト7.5YR4/1に第4層が粒状に少し混じる
36　黒褐色土10YR3/1（撹乱か）
37　灰黄褐色粘土質シルト10YR4/2（撹乱か）
38　にぶい黄橙色粘土10YR7/4
39　褐灰色粘土質シルト10YR5/1
40　黒褐色粘土質シルト10YR3/1（SX16埋土）
41　暗褐色シルト10YR3/3に明黄褐色粘土質シルト10YR7/6が5～10cmのブロック状に混じる（SX16崩落土）
42　褐灰色粘土質シルト7.5YR4/1（撹乱か）
43　褐灰色粘土質シルト7.5YR4/1に第4層が粒状に少し混じる
44　褐灰色シルト10YR5/1に第4層が斑状に混じる
45　黒褐色粘土質シルト10YR3/1
46　灰黄褐色粘土質シルト10YR4/2（撹乱か）
47　灰黄褐色粘土質シルト10YR4/2に3cm程のにぶい黄褐色粘土10YR5/4がブロック状に多量に混じる
48　灰黄褐色粘土質シルト10YR4/2（SD24埋土）
49　灰黄褐色粘土質シルト10YR4/2に3mmほどのにぶい黄褐色粘土10YR5/4が少し混じる
50　黒褐色粘土質シルト10YR3/1（SX16埋土）
51　にぶい黄褐色粘土質シルト10YR4/3に5mmほどのにぶい黄褐色粘土10YR5/4がブロック状に混じる（SX16崩落土）
52　灰黄褐色粘土質シルト10YR4/2に径10cmまでの礫が多く混じる
53　にぶい黄色シルト2.5Y6/4に径10cmまでの礫が多く混じる（基盤層）
54　黒褐色粘土質シルト10YR3/2（A3 P1 埋土　柱痕跡）
55　灰黄褐色粘土質シルト10YR4/2（A3 P1 埋土　柱掘形）
56　黒褐色粘土質シルト10YR3/2に径10cmまでの礫が混じる（SX23埋土）
57　黒褐色粘土質シルト10YR3/1（SX23埋土）
58　暗褐色粘土質シルト10YR3/3に5mmほどのにぶい黄褐色粘土10YR5/4がブロック状に混じる（SX23崩落土か）
59　暗褐色粘土質シルト10YR3/3に5mmほどのにぶい黄褐色粘土10YR5/4がブロック状に多量に混じる（SX23崩落土か）
60　灰黄褐色粘土質シルト10YR4/2に3cmほどのにぶい黄褐色粘土10YR5/4がブロック状に混じる（SD22埋土）
61　にぶい黄褐色粘土質シルト10YR4/3に1cmほどのにぶい黄褐色粘土10YR5/4がブロック状に多量に混じる（SD22埋土）
62　黒褐色粘土質シルト10YR3/1（SX16埋土）
63　暗褐色粘土質シルト10YR3/3に5mmほどのにぶい黄褐色粘土10YR5/4がブロック状に混じる（SX16崩落土）
（層名のないものは、植物の根などによる撹乱）

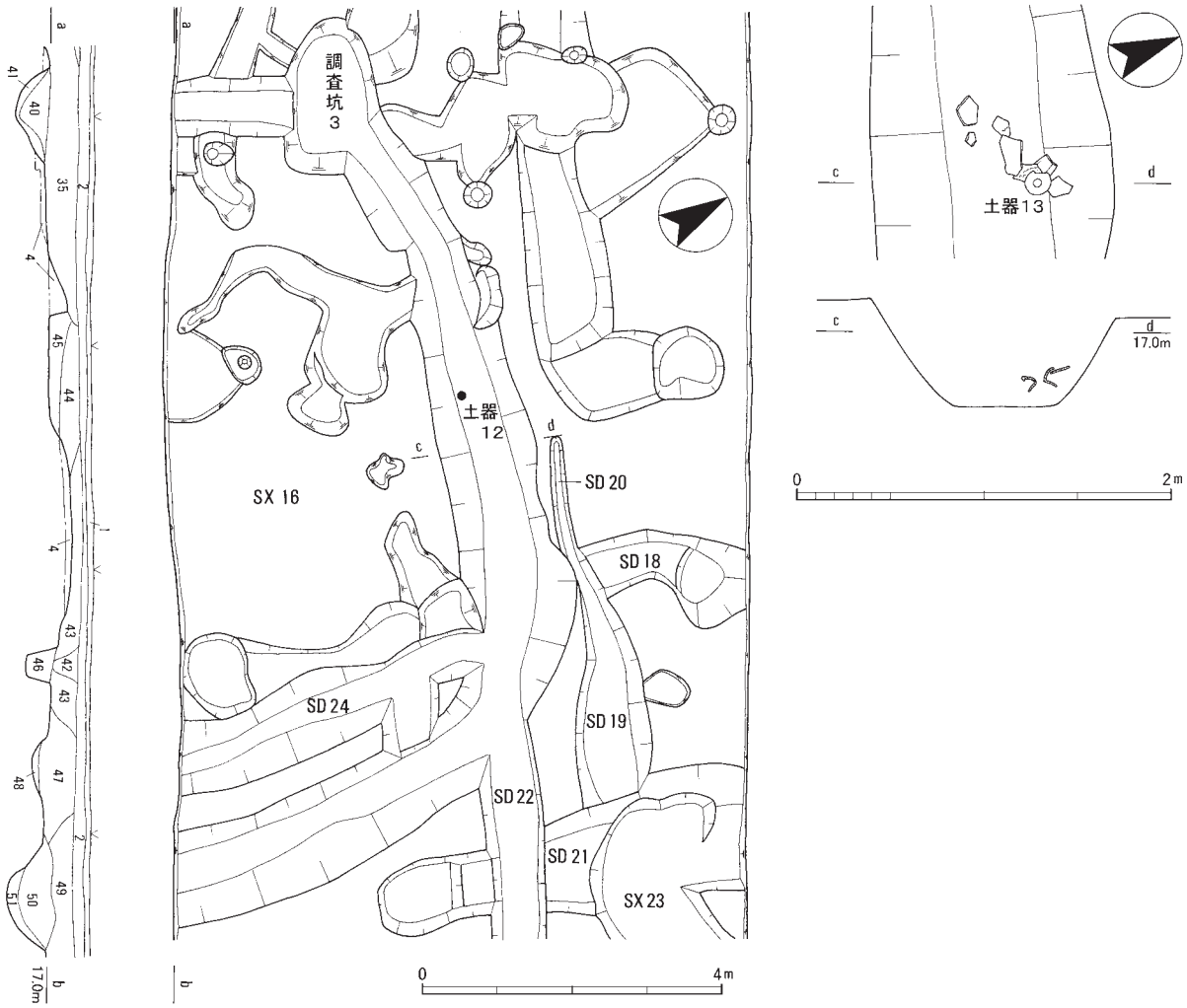
**第４図　　遺構平面図　（１：200）、土層断面図　（１：100）**




**第５図　　ＳＸ 11・12 実測図**　（１：100）（南壁の土層断面は、第４図と同じ）




**第６図　ＳＸ 14・15 実測図**（１：100）、**ＳＸ 14 遺物出土状況図**（１：40）（南壁の土層断面は、第４図と同じ）




**第７図**　ＳＸ 16 実測図（１：100）、ＳＸ 16 遺物出土状況図　（１：40）（南壁の土層断面は、第４図と同じ）

不明である。ＳＤ24 より新しい。北辺中央の周溝底付近で壺（12・13）を確認した。いずれも口縁部から体上部までは割れが少なく、体部下半は細かく割れる。12 の口縁部から体上部は倒立して、13 の口縁部は正位で確認した（第７図、写真図版７下）。

**ＳＸ23**　調査区東端で屈曲した溝の一部が確認できたのみである。埋土の状況の類似性から方形周溝墓である可能性を考えた。

**（２）その他の遺構**

古代から中世にかけての溝と土坑を確認した。

**ＳＤ13**　幅約 1.2～1.7m、深さ約 0.3mの溝で、方位は、緩やかなうねりをもつが、概ねＥ20°Ｓ前後である。東端で北に曲がる。埋土は、茶褐色系の土で、方形周溝墓の埋土とは区別できた。遺物は、古代の須恵器片や瓦片、中世の土師器片や山茶椀などが出土した。出土量はあまり多くない。須恵器には、焼成に失敗して融着したようなものもあった。

**ＳＫ17**　ＳＸ15 の周溝の内側で確認した。不定形で、遺物は出土していない。風倒木の痕跡と考えられる。

**ＳＤ18**　幅約 0.7m、深さ約 0.1mである。土師器甕小片が出土した。風倒木の痕跡と考えられる。

**ＳＤ19**　幅約 1.0m、深さ 0.1～0.2mである。弥生土器壺片が出土した。

**ＳＤ20**　幅約 0.2m、深さ約 0.1mで、ＳＤ19 に続く。弥生土器もしくは土師器の小片が出土した。植物の根などの可能性が高い。

**ＳＤ21**　幅約 0.8～1.4m、深さ 0.2～0.3mの溝である。当初、方形周溝墓の一部と考えたが、埋土の状況が他の方形周溝墓と異なることや形状が屈曲しないことなどから、溝であると考えた。遺物は弥生土器壺（14）が出土した。

**ＳＤ22**　幅約 0.8m、深さ約 0.4mの溝である。検出時は、ＳＸ16 の周溝と重複し、後出する状況を確認したが、奈良時代の瓦が出土しており、検出時の重複の前後関係の認識に誤りがあった可能性がある。

**ＳＤ24**　幅約 0.6～1.1m、深さ約 0.3mの溝である。ＳＸ16 の周溝より後出する。遺物は出土していない。

**小穴・柱穴**　ＳＸ11・12 付近、及びＳＸ14・15 付近に若干の集中が見られる。全体的に遺物量は少なく、遺物の全くないものもあった。遺物の時期は、古代から中世が多い。Ａ３Ｐｉｔ１では須恵器杯蓋（24）が、Ｋ３Ｐｉｔ１では古代の土師器甕口縁部（25）が出土した。　（西村美幸）

**〔註〕**

① 墳丘の平面規模の計測位置については、報告書によって統一を欠くが、ここでは奈良県の集成に合わせて「溝底からの墳丘の立ち上がりを起点として計測」した。ただし、一覧表へは溝の芯芯、検出面の上端の値も併記した。（豆谷和之「中南和地区の方形周溝墓域の検討」『みずほ第 41 号』弥生文化研究会　2009 年）

② 立花実「弥生墓制研究の新展開」『季刊考古学第 92 号』雄山閣　2005 年では、同時存在する方形周溝墓の埋没状況について説明し、「土層の堆積状況での判断が重要」としている。今回の調査では、調査担当である筆者の認識不足で、重複部分での土層観察を怠ってしまったためこれ以上の言及ができない。大きな反省点である。

③ 出土状況については、これも筆者の認識不足で周溝の底から「浮いた」ものは図化せずに写真と遺構略図への高さのメモのみとしてしまった。本文では、写真及びこのメモをもとに記述を行った。

| 遺構番号 | 旧名称 | グリッド | 方位 | 規模（m） | 時期 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| ＳＸ11 | ＳＸ11 | A・B・C3 | N67°W | 東西（溝底7.5以上、上端6.8以上、芯芯不明）<br>南北 不明<br>周溝幅 1.5、周溝深さ 0.05 ～ 0.2 | 弥生 | |
| ＳＸ12 | ＳＸ12 | C2～F3 | N70.5°W | 東西（溝底7.4～7.8、上端6.7～7.0、芯芯不明）<br>南北（溝底5.5以上、上端5.2以上、芯芯6.0以上）<br>周溝幅 1.8、周溝深さ 0.05 ～ 0.25 | 弥生 | |
| ＳＤ13 | ＳＤ13 | D～I3<br>I～L2 | － | 幅 1.2～1.7 、深さ 0.3 | 室町 | 東端で北に屈曲する |
| ＳＸ14 | ＳＸ14 | F2～H3 | N16°E | 東西（溝底6.6、上端5.2、芯芯6.8）<br>南北（溝底6.1以上、上端6.0以上、芯芯6.6以上）<br>周溝幅 1.5、周溝深さ 0.2 ～ 0.4 | 弥生 | |
| ＳＸ15 | ＳＸ15 | H2～J3 | N16°E | 東西（溝底7.9、上端7.5、芯芯8.5）<br>南北（溝底7.0以上、上端6.8以上、芯芯7.2以上）<br>周溝幅 1.4、周溝深さ 0.3 ～ 0.5 | 弥生 | |
| ＳＸ16 | ＳＸ16 | K2～M3 | N74.5°W | 東西（溝底9.5以上、上端9.0以上、芯芯10.0以上）<br>南北 不明<br>周溝幅 1.5、周溝深さ 0.35 ～ 0.6 | 弥生 | |
| ＳＫ17 | ＳＫ17 | I2 | － | 2.6 × 2.0 （不定形） | － | 風倒木か |
| ＳＤ18 | ＳＤ18 | L2 | － | 幅 0.7 、深さ 0.1 | － | 風倒木か |
| ＳＤ19 | ＳＤ19 | L・M2 | － | 幅 1.0 、深さ 0.1 ～ 0.2 | 不明 | 木の根か |
| ＳＤ20 | ＳＤ20 | L2 | － | 幅 0.2 、深さ 0.1 | 古代？ | 木の根か |
| ＳＤ21 | ＳＸ21 | M2・3 | － | 幅 0.8 ～ 1.4 、深さ 0.2 ～ 0.3 | 不明 | |
| ＳＤ22 | M2 Pit1 | M2 | － | 幅 0.8 、深さ 0.4 | 奈良 | |
| ＳＸ23 | ＳＤ23 | M2 | － | 溝幅 1.2 、深さ 0.3 | 弥生 | |
| ＳＤ24 | ＳＤ24 | L・M3 | － | 幅 0.6 ～ 1.1 、深さ 0.3 | 不明 | |

**第１表　遺構一覧表**　（遺構番号は、第１次調査の番号との重複を避けるため、11 番から始まっている）

# 第４章　遺物

## １　方形周溝墓出土の遺物

方形周溝墓からは、ほぼ完形に復元できる壺や高杯が出土している。いずれも弥生時代後期前半のものである。

**ＳＸ11 出土遺物（１）**

弥生土器壺片が出土した。遺構の大部分が削平されており、遺物の量が少なく、小片が多い。壺の底部（１）は、重機による表土除去中に出土したものであるが、ＳＸ11 の埋土直上から出土しているため、この遺構出土とした。

**ＳＸ12 出土遺物（２～４）**

弥生土器短頸壺（２）、広口壺（３）、壺（４）が出土した。３の外面はヨコナデ、４の外面にはハケメが施されている。

**ＳＸ14 出土遺物（５）**

５は、北辺東コーナーで確認した弥生土器広口壺である。ほぼ完形で出土した。体部は、中央付近で最大径になり球形に近い。外面全面にハケメ後のミガキが、頸部には櫛描直線文が施されている。上村氏による編年の伊勢Ｖ－４～５様式ごろのものであろうか。

**ＳＸ14 もしくはＳＸ15 出土遺物（６・７）**

６・７はＳＸ14 とＳＸ15 の重複部でＳＤ13 の掘削後に出土した遺物である。弥生土器広口壺（６）は、外面全面にハケメ後のミガキが、頸部には櫛描直線文が施されている。５とよく似た土器である。高杯（７）は、ワイングラス形のもので、外面全面にハケメ後のミガキが施されている。脚部には３孔の透孔をもち、上半には櫛描直線文と刺突列点文が施されている。

**ＳＸ15 出土遺物（８・９）**

８は東辺中央のＳＤ13 掘削後に、９は北壁から出土した遺物である。いずれも弥生土器広口壺で、８は口縁部が直線的に開き、９は口縁端部が垂下する。８は、外面全面にハケメ後のミガキが施されるが、ミガキ方向はやや乱雑である。また、頸部への櫛描直線文は施されていない。９は、口縁端部をナデて仕上げ、肩部に櫛描直線文と波状文が施されている。

**ＳＸ16 出土遺物（10～13）**

弥生土器広口壺（10・12・13）、台付短頸壺（11）が出土した。いずれも北辺から出土した。12 は口縁部が直線的に開き、10・13 は口縁端部が拡張、垂下する。12 は外面全面にハケメが施され、肩部に櫛描直線文と波状文が施されている。13 は、外面全面にハケメ後のミガキが、頸部には櫛描直線文と波状文が施されている。11 は、口縁部が直線的に開くもので、外面全面にハケメ後のミガキが施されている。台部は残っていないが、接合痕跡があることから台付であると考えた。これらの時期は、伊勢Ｖ－４～５様式におさまると考えられるが、12 の調整にミガキが施されていないことや 13 の口縁部が拡張していることなどから、ＳＸ14、ＳＸ15 より後出すると考えられる。

## ２　その他の遺構出土の遺物

**ＳＤ21 出土遺物（14）**

弥生土器壺の底部（14）が出土した。当初ＳＸ23 と同一の遺構と考えて掘削していたため、ＳＸ23 の遺物である可能性がある。

**ＳＤ13 出土遺物（15～21）**

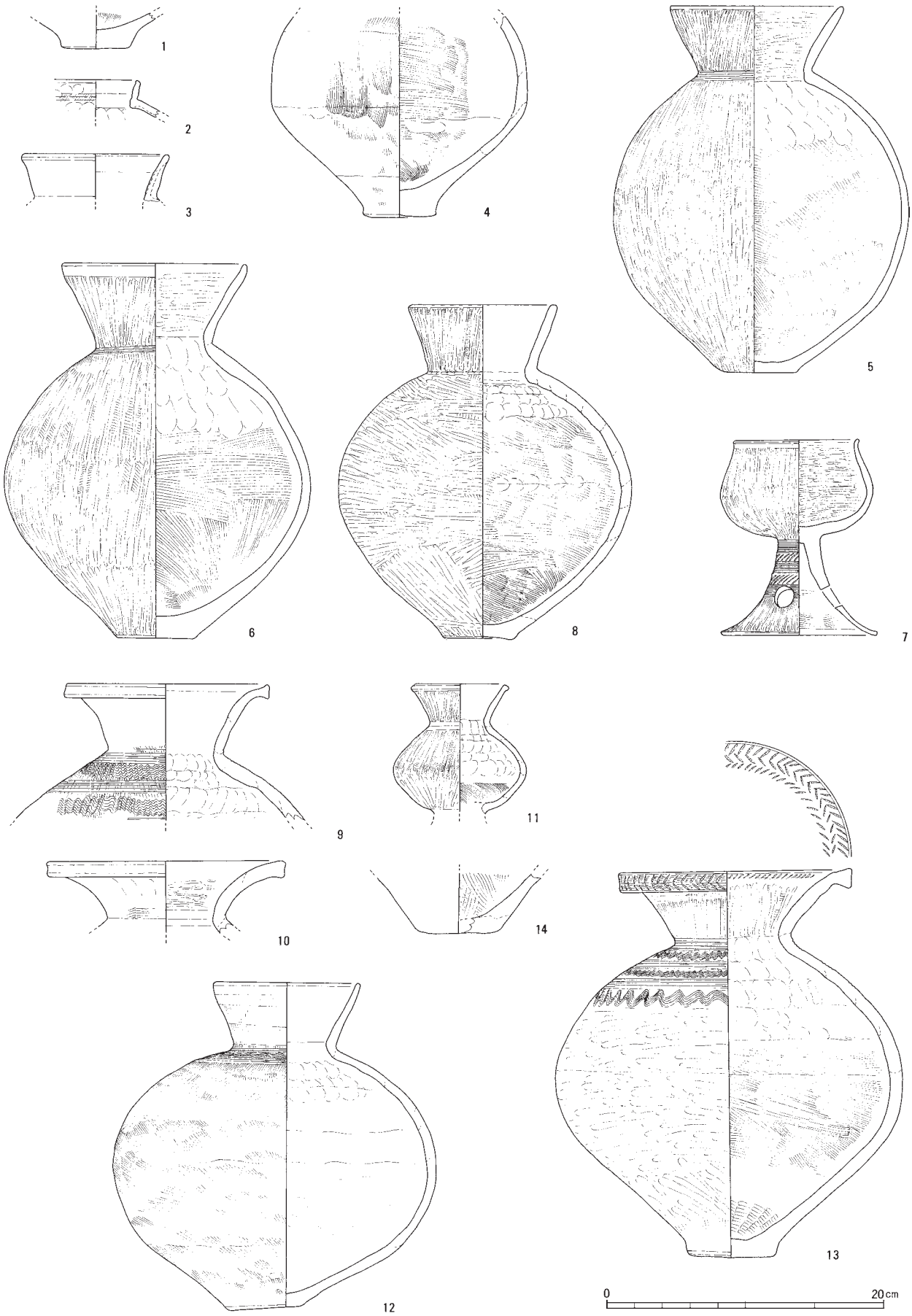
古墳時代から中世にかけての遺物が出土した。須恵器甕（15）は、ヘラ描直線文が施されており、田辺氏による陶邑編年のＴＫ43 併行期（6 世紀後半）以降のものと考えられる。土師器鍋（16）は、南伊勢系土師器編年の第３段階（14 世紀代）に相当しよう。陶器山茶椀（17）は、渥美産のもので藤澤氏による編年の第５～第６型式（13 世紀後半）と考えられる。須恵器甕（18・19）は、同一個体であると考えられる。18 は、外面同士が融着している。焼成に失敗した品であろう。砥石（20）は、砂岩製のもので、３面に研痕を持つ。平瓦（21）は、縄タタキと布目痕跡をもつものである。

**ＳＤ19 出土遺物（22）**

叩石（22）が出土している。花崗岩製であろうか。１箇所の磨面を持つ。

**ＳＤ22 出土遺物（23）**

軒平瓦（23）が出土した。瓦当は大きく破損して




第８図　　出土遺物実測図（１）（１：４）

おり、区画と珠文しか確認できない。上面には、布目痕をもつ。下面は、接合箇所で剥がれている。

### 3　小穴出土の遺物（24・25）

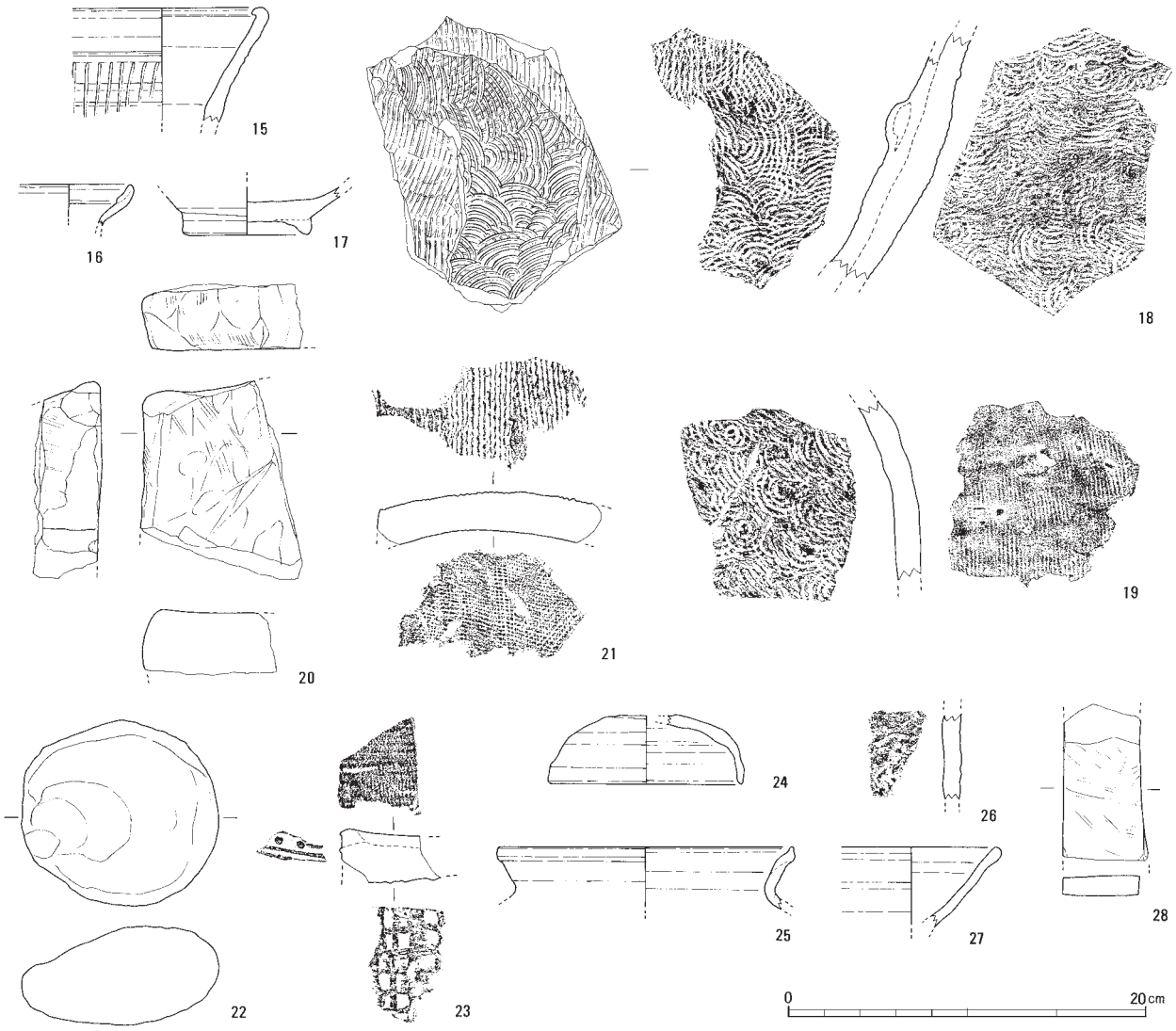
今回の調査ではいくつかの小穴が確認されたが、遺物の出土した小穴は少なく、またそれぞれの遺物出土量も少量であった。ここでは、図上復元が可能なものを図示した。

須恵器杯蓋（24）は、調査区西端の小穴から出土した。田辺氏による陶邑編年のＴＫ209～217 併行期（７世紀前半）のものと考えられる。土師器甕（25）は、口縁端部をつまみあげるもので、飛鳥～奈良時代のものと考えられる。

### 4　包含層出土の遺物（26～28）

包含層からは、縄文時代から近世にかけての遺物が出土した。ここでは、図上復元が可能なものを図示した。

縄文土器深鉢（26）は、山形文とポジ楕円文を持つもので、黄島式併行期のものと考えられる。陶器山茶椀（27）は、口縁部のみである。渥美産のもので藤澤氏による編年の第５～第６型式であろうか。砥石（28）は、小型で薄型のものである。４面に研痕を持つ。　（西村美幸）




第９図　　出土遺物実測図（２）（１：４）

〔註〕

遺物の年代等に関しては、以下の文献を参考にした。

- 縄文土器：『縄文土器大観１　草創期　早期　前期』小学館　1989 年
- 弥生土器：上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年　東海編』木耳社　2002 年
- 須恵器：田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981 年
- 南伊勢系土師器：伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Miehistory vol.1』三重歴史文化研究会　1990 年及び、伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要　第１号』三重県埋蔵文化財センター　1992 年
- 陶器（山茶椀）：藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要　第３号』三重県埋蔵文化財センター　1994 年

| 番号 | 実測番号 | 様・質 | 器種など | グリッド | 遺構・層名等 | 大きさ(cm) | 調整・技法の特徴 | 胎土 | 色調 | | 残存度 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 011-02 | 弥生土器 | 壺 | B3 | ＳＸ11 | （底）　5.0 | 外；ナデ<br>内；ハケメ | 密 | 浅黄橙 | 10YR8/4 | 底部9/12 | |
| 2 | 007-03 | 弥生土器 | 短頸壺 | E2 | ＳＸ12 | | 外；ハケメ→ナデ<br>内；ヨコナデ、オサエ | 密 | 浅黄橙 | 10YR8/4 | 小片 | |
| 3 | 007-02 | 弥生土器 | 広口壺 | E2 | ＳＸ12 | （口）10.6 | 外；ヨコナデ<br>内；ヨコナデ | 密 | にぶい黄橙 | 10YR7/4 | 口縁部3/12 | |
| 4 | 007-01 | 弥生土器 | 壺 | E2 | ＳＸ12 | （底）　5.2 | 外；ハケメ<br>内；ハケメ、オサエ | 密 | にぶい黄橙 | 10YR7/3 | 底部4/12 | |
| 5 | 001-01 | 弥生土器 | 広口壺 | H2 | ＳＸ14 | （口）12.5<br>（高）26.5 | 外；ハケメ→ミガキ、（頸）櫛描文<br>内；（口縁）ハケメ→ミガキ、（頸）オサエ<br>（体）ハケメ | 密 | にぶい橙 | 7.5YR7/4 | 完存 | 体部の穴は、穿孔ではなく石が当たった痕跡 |
| 6 | 004-01 | 弥生土器 | 広口壺 | H3 | ＳＸ14 or 15 | （口）13.4<br>（高）27.1 | 外；ハケメ→ミガキ、（頸）櫛描文<br>内；（口縁）ミガキ、（頸）オサエ<br>（体）ハケメ | やや密 | にぶい黄橙 | 10YR6/4 | 底部完存 | |
| 7 | 005-01 | 弥生土器 | 高杯 | H3 | ＳＸ14 or 15 | （口）　9.0<br>（高）14.2 | 外；ハケメ→ミガキ、（脚）櫛描文、穿孔<br>内；（杯）ハケメ→ミガキ、（脚）ハケメ | 密 | 浅黄橙 | 7.5YR8/4 | 底部8/12 | |
| 8 | 003-01 | 弥生土器 | 広口壺 | J2 | ＳＸ15 | （口）10.6<br>（高）24.2 | 外；ハケメ→ミガキ<br>内；（体）ハケメ→オサエ | 密 | にぶい橙 | 7.5YR7/4 | 底部完存 | |
| 9 | 007-04 | 弥生土器 | 広口壺 | H2 | ＳＸ15 | （口）14.8 | 外；ハケメ→ナデ、（頸～体）櫛描文<br>内；（口縁）ハケメ→ナデ、（頸～体）オサエ | 密 | にぶい黄橙 | 10YR7/3 | 口縁部6/12 | |
| 10 | 008-01 | 弥生土器 | 広口壺 | L3 | ＳＸ16 | （口）17.2 | 外；ハケメ→ナデ<br>内；（口縁）ミガキ、（頸）オサエ、ナデ | 密 | にぶい橙 | 7.5YR6/4 | 口縁部9/12 | |
| 11 | 007-05 | 弥生土器 | 台付短頸壺 | L2 | ＳＸ16 | （口）　7.0 | 外；ハケメ→ミガキ<br>内；（体上部）オサエ、（体下部）ハケメ | 密 | 黒褐 | 10YR3/1 | 口縁部4/12 | |
| 12 | 006-01 | 弥生土器 | 広口壺 | L3 | ＳＸ16 | （口）10.6<br>（高）23.5 | 外；ハケメ、（頸）櫛描文<br>内；ナデ、（頸）オサエ | 密 | 灰白 | 10YR8/2 | 口縁部完存 | |
| 13 | 002-01 | 弥生土器 | 広口壺 | L2 | ＳＸ16 | （口）16.9<br>（高）28.1 | 外；ハケメ→ミガキ、頸部と口縁部に櫛描文<br>内；（口縁）ハケメ→ミガキ、（頸）オサエ<br>（体）ハケメ | やや粗 | 黄灰 | 2.5YR5/1 | ほぼ完存 | |
| 14 | 008-02 | 弥生土器 | 壺 | M3 | ＳＤ21 | （底）　5.4 | 外；風化のため不明<br>内；ハケメ | やや密 | にぶい黄橙 | 10YR7/3 | 底部3/12 | |
| 15 | 010-02 | 須恵器 | 甕 | H3 | ＳＤ13 | | 外：ヨコナデ、直線文<br>内：ヨコナデ | 密 | 黄灰 | 2.5YR4/1 | 小片 | |
| 16 | 010-03 | 土師器 | 鍋 | J2 | ＳＤ13 | | 外：ヨコナデ<br>内：ヨコナデ | 密 | 浅黄橙 | 10YR8/3 | 小片 | |
| 17 | 010-04 | 陶器 | 山茶椀 | G3 | ＳＤ13 | （高台）7.2 | 外：ロクロナデ、貼付、糸切り<br>内：ロクロナデ | 密 | 灰白 | 5Y8/1 | 高台完存 | |
| 18 | 009-01 | 須恵器 | 甕 | I3 | ＳＤ13 | | 外：タタキ目<br>内：あて具痕（青海波） | 密 | 灰 | N5/0 | 小片 | 焼成に失敗し、融着している。19と同一個体。 |
| 19 | 008-03 | 須恵器 | 甕 | I3 | ＳＤ13 | | 外：タタキ目<br>内：あて具痕（青海波） | 密 | 灰 | 7.5Y4/1 | 小片 | 18と同一個体。 |
| 20 | 010-01 | 石製品 | 砥石 | G3 | ＳＤ13 | | ３面に研痕あり | － | － | － | | 砂岩か。重量485g |
| 21 | 010-05 | 瓦 | 平瓦 | H3 | ＳＤ13 | | 外：縄タタキ<br>内：布目痕 | やや密 | 灰白 | 5Y7/1 | 小片 | |
| 22 | 011-01 | 石製品 | 凹石？ | M2 | ＳＤ19 | （径）10.5～10.8 | 磨面1箇所あり | － | － | － | ほぼ完存 | 重量750g |
| 23 | 010-06 | 瓦 | 軒平瓦 | M2 | ＳＤ22 | | 上：布目痕<br>下：格子目（接合痕跡） | 不良 | にぶい橙 | 7.5YR7/4 | 小片 | 瓦当の下部が接合痕箇所で剥がれている。 |
| 24 | 011-04 | 須恵器 | 杯蓋 | A3 | Ｐ１ | （口）11.0<br>（高）　3.8 | 外；回転ナデ、ヘラ切りナデ<br>内；回転ナデ、ナデ | 密 | 灰黄 | 2.5YR7/2 | 口縁部5/12 | |
| 25 | 011-03 | 土師器 | 甕 | K3 | Ｐ１ | （口）16.5 | 外：ヨコナデ<br>内：ヨコナデ | 密 | 浅黄橙 | 10YR8/4 | 口縁部3/12 | |
| 26 | 011-05 | 縄文土器 | 深鉢？ | － | 包含層 | | 外：押型文（山形、ボジ楕円）<br>内：ナデ | 密 | にぶい黄橙 | 10YR4/5 | 小片 | |
| 27 | 011-06 | 陶器 | 山茶椀 | － | 表土 | | 外；ロクロナデ<br>内；ロクロナデ | 密 | 灰黄 | 2.5Y7/2 | 小片 | |
| 28 | 011-07 | 石製品 | 砥石 | － | 表土 | （長辺）8.7<br>（短辺）4.7 | ４面に研痕あり | － | － | － | 両端欠 | |

**第２表　　出土遺物観察表**

# 第５章　調査のまとめ

調査の結果、小谷Ａ遺跡は、弥生時代後期の方形周墓溝を中心とし、その他に古墳時代から中世の遺構が若干ある複合遺跡であることが確認された。以下、当遺跡の主要な遺構である方形周溝墓の特徴について検討し、小谷Ａ遺跡の位置づけについて考えたい。

## １　方形周溝墓の特徴について

### （１）方形周溝墓の形状

今回の調査では、６基の方形周溝墓が確認された。これらの築造時期は、弥生時代後期前半、上村氏による編年[①]の伊勢Ｖ－４～５様式ごろと考えられる。調査範囲の制限により、全形が確認されたものはないが、ＳＸ14・15は南辺の中央部が途切れて陸橋となる。

方形周溝墓の形態は、周溝の切れ目（陸橋ないし張出部）によって区分され、時期的な特徴が確認されている。小谷Ａ遺跡ＳＸ14・15のように周溝の中央部が切れて陸橋（ないし張出部）となるものは、三重県内では中期中葉～後葉に見られるようになり、後期には類例が増加すると考えられている[②]。

小谷Ａ遺跡の立地する天花寺丘陵周辺でも、下之庄東方遺跡や田村西瀬古遺跡などで同様の形態のものが確認されている。下之庄東方遺跡の前山地区[③]では、伊勢Ｖ－３様式ごろの土器が出土しており、中には長軸26mを超える大型のものも確認されている。下之庄東方遺跡の高畑地区[④]、小野地区、四反畑地区[⑤]や田村西瀬古遺跡[⑥]での同様の形態のものは伊勢Ⅵ様式に位置づけられよう。小谷Ａ遺跡は、周囲の遺跡の状況からも一般的な形状を示していることがうかがえる。

### （２）築造の順序について

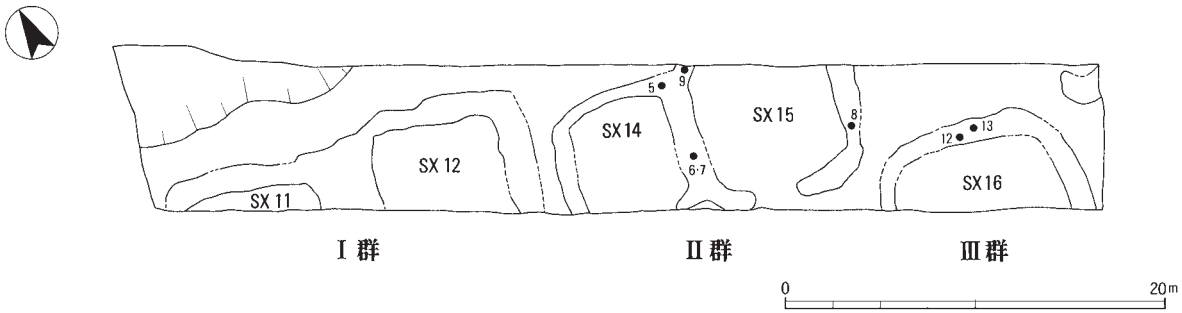
小谷Ａ遺跡で確認された方形周溝墓のうち、SX11・12及びＳＸ14・15はそれぞれ北辺をそろえ、溝を接した形で確認されている。ここで、ＳＸ11・12をＩ群、ＳＸ14・15をⅡ群、ＳＸ16をⅢ群とし、築造順について考察したい。

それぞれの群は、重複せず、１ｍほど離れての立地となり、築造時には先に築造されたものを「墓」として認識していた可能性が高いと考えられる。遺物をみると、ＳＸ16のものがＳＸ14・15のものより新しい特徴を持つため、築造順序はⅡ群→Ⅲ群が想定される。

方形周溝墓の配置形態については、周溝を接した直列状の配置や市松模様状の配置が確認されている[⑦]。直列状の配置形態は端から順に築造されるのが一般的である。小谷Ａ遺跡の３つの群はそれぞれ周溝を接しないが、すでにある墓に隣接して築造するには端から順に行う方法が簡単であり、Ⅰ群→Ⅱ群→Ⅲ群の順に築造されたと考えるのが妥当であろう。

### （３）土器の配置について

小谷Ａ遺跡では、周溝から完形に近く復元できる遺物が出土している。出土位置は、各辺の中央部もしくはコーナー部で、深さは溝底付近と、底から30㎝程度上の２通りがある。ＳＸ14出土の土器５とＳＸ14・15重複部の土器７はその場に１個体分あるが、他の土器は分[⑧]割しており、土器８・12・13は体部上半とそれ以下に分かれている。13は口縁部をもつ破片を溝底に置いているような状況が伺われる。口縁部とそれ以外という分割に意味がある可能性も考えられよう。




第10図　方形周溝墓配置図　（１：400）（ 数字は土器の番号 ）

## 2　小谷Ａ遺跡の位置づけ

### （1）弥生時代の状況

小谷Ａ遺跡の南に位置する標高 36m前後の天花寺丘陵上には、弥生時代後期前半に環濠をともなう大規模な集落が確認されている。環濠の内部では、竪穴住居 43 棟、掘立４棟が確認され、集落は北群・南群・西群に分かれると考えられている。出土遺物から、この集落は後期前半の範疇におさまり、後期後半には廃絶すると考えられている[⑨]。この集落に対応する墓としては、方形周溝墓の可能性があるもの１基、土器棺墓の可能性があるもの１基が確認されているのみである。

方形周溝墓の可能性が考えられている遺構は、小谷赤坂遺跡の第６・７次調査で確認したＳＸ386 である[⑩]。このＳＸ386 は東辺を欠く形状であると考えられ、埋葬施設は確認されていない。周溝からは、ベンガラと考えられる赤色顔料の付着した高杯などの遺物が出土している。概ね上村氏による編年のＶ－１様式に相当し、小谷Ａ遺跡のものより古い。

土器棺墓の可能性がある遺構は清水谷遺跡の第４次調査で確認したＳＫ335 である[⑪]。これは大型の広口壺を横位に置いたもので、人骨等は出土していないが、遺構の状態から土器棺墓である可能性が指摘されている。遺物は垂下口縁をもつ大型の広口壺で、小谷Ａ出土遺物と同時期もしくは若干古く位置づけられよう。

弥生時代後期の集落構造の一例として、弥生後期の遺跡である松阪市久保町の草山遺跡について、「260 棟以上の竪穴住居や掘立柱建物、そして 28 基以上の方形周溝墓が発掘調査で確認されているが、住居跡が台地の平坦部付近を中心に建てられているのに対し、方形周溝墓は台地の縁辺部に累々と築かれている。」様相が指摘されている[⑫]。小谷Ａ遺跡は、天花寺丘陵上の住居群（北群）から 200mほど北に位置し、間に緩傾斜地もあるため即断はできないが、小谷Ａ遺跡を含む縁辺部一帯が天花寺丘陵上に暮らす人々の墓域であった可能性を考慮する必要があろう。

### （2）古墳時代以降の状況

古墳時代以降の遺構としては、調査区の西端で完形の須恵器を含む小穴を確認しているが、建物としてはまとまらなかった。調査区の西はほどなく急傾斜地となるが、この周囲での古墳時代の遺構が確認される可能性が高い。

古代の遺構には、溝や小穴がある。また、中世のＳＤ13 からは焼きひずんだ古代の須恵器片や瓦片が出土している。これらは小谷Ａ遺跡の東方にある天花寺瓦窯跡等で焼成された製品の失敗品などが後に混入したものと考えられる。

このＳＤ13 は、ほぼ等高線に沿って掘削されている。幅約 1.2～1.7m、深さ約 0.3mとあまり大きくはないが、区画の意味を持ったのであろうか。周辺遺跡との関係の解明が望まれる。　　（西村美幸）

**〔註〕**

① 上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年－東海編－』株式会社木耳社　2002 年

② 竹内英昭「方形周溝墓」『三重県史　資料編　考古１』三重県　2005 年

③ 和氣清章「下之庄東方遺跡（前山地区）」『三重県史　資料編　考古１』三重県　2005 年

④ 『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅰ　下之庄東方遺跡（高畑地区）』　三重県教育委員会　1987 年

⑤ 『一級河川中村川埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ　下之庄東方遺跡（小野・四反畑・夜ノ堀地区）』　三重県教育委員会　1988 年

⑥ 『田村西瀬古遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1999 年

⑦ 会下和宏「方形周溝墓の配置形態に関する一考察－畿内地域を中心として－」『博古研究　第 15 号』博古研究会　1998 年

⑧ 藤井整「方形周溝墓調査の課題と方法」『みずほ第 41 号』大阪弥生文化の会　2009 年では、土器の配置について考える必要性を指摘している。

⑨ 「総括」『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅶ』三重県埋蔵文化財センター　2005 年

⑩ 『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅵ』三重県埋蔵文化財センター　2005 年

⑪ 『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター　2000 年

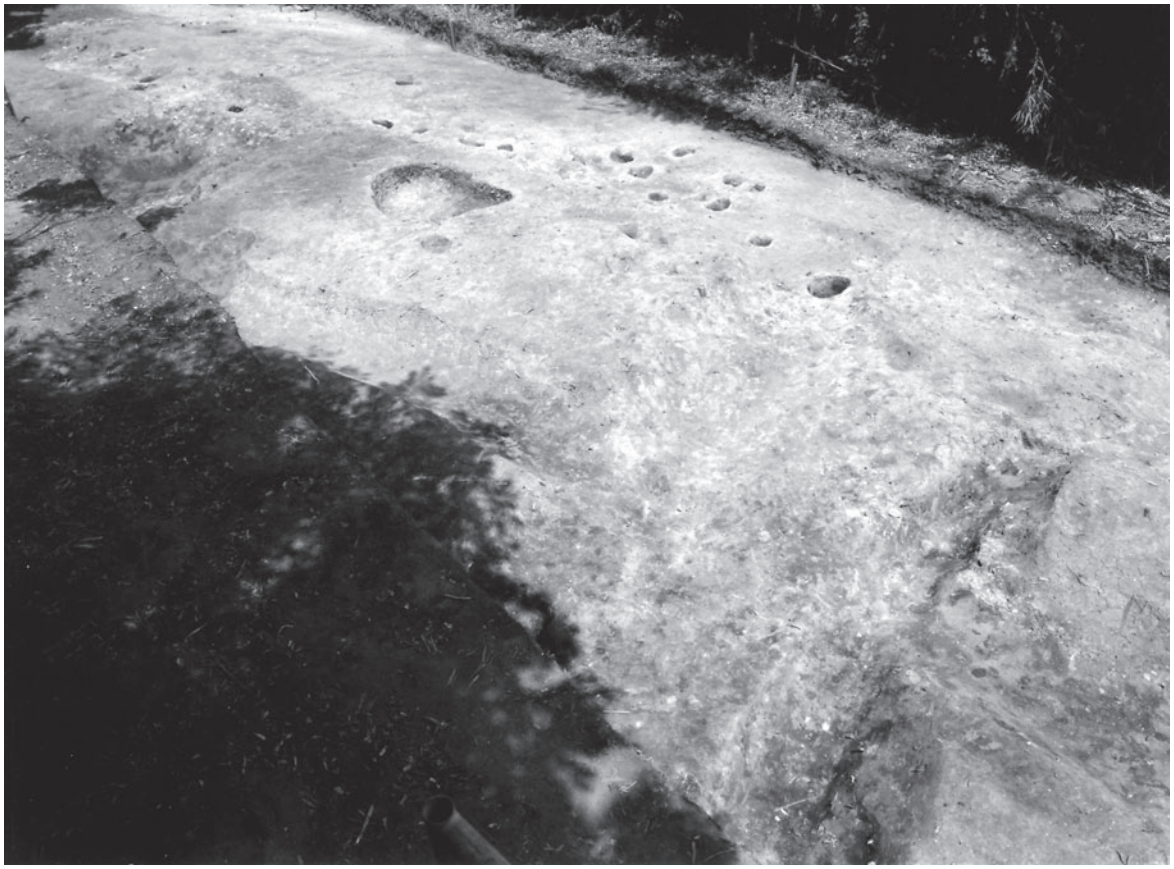
⑫ 註②の文献と同一

# 写　真　図　版

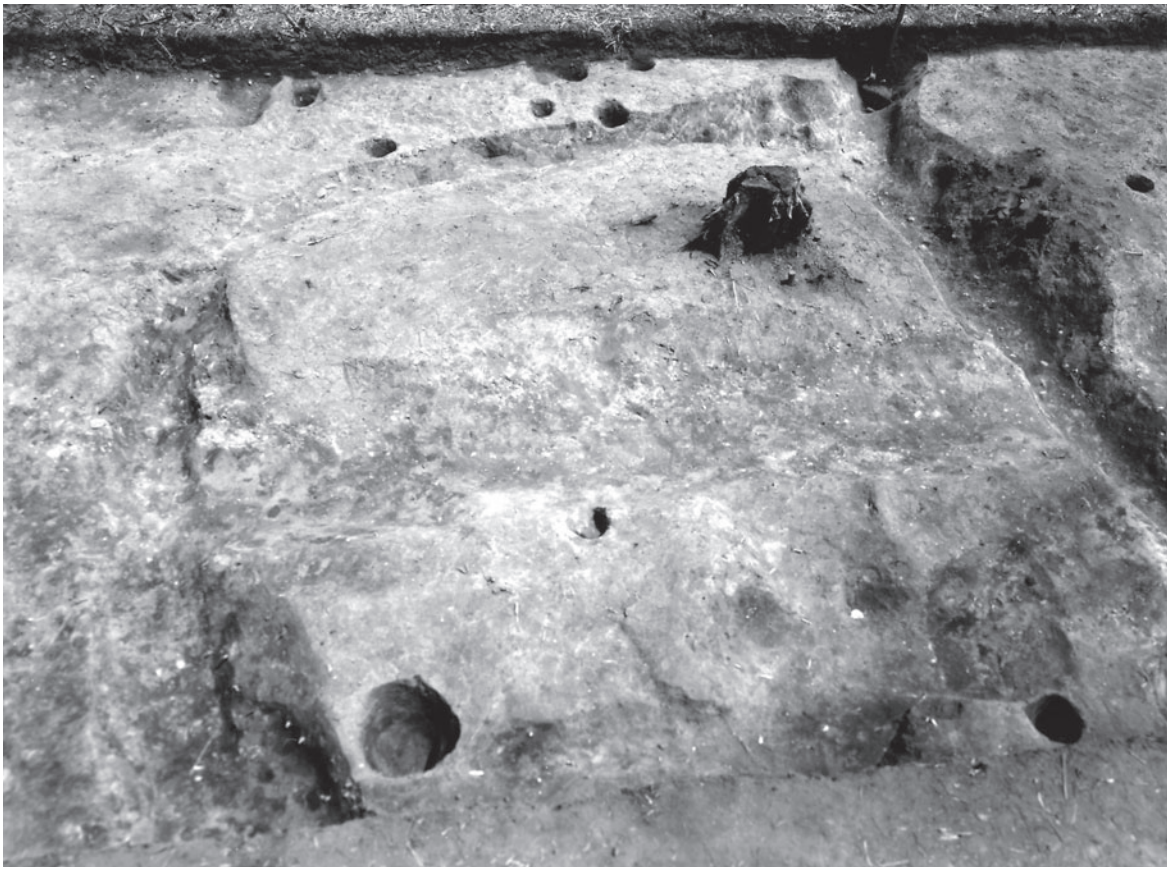
調査前風景　（西から）

写真図版２

調査区全景　（東から）



ＳＸ 11・12　（南から）



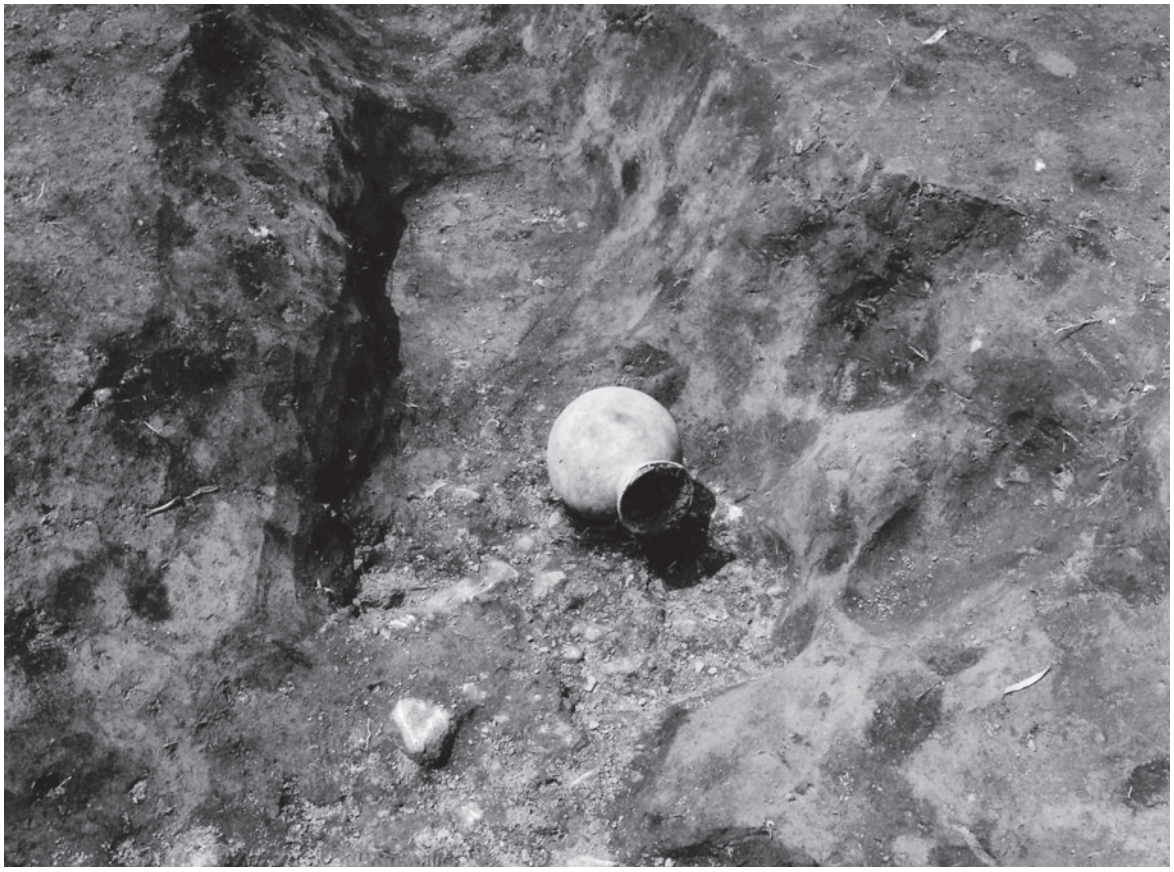
ＳＸ 14　（南から）

写真図版４

ＳＸ 15　（南から）

ＳＸ 16　（西から）

土器５・９出土状況　（西から）



土器５出土状況　（東から）

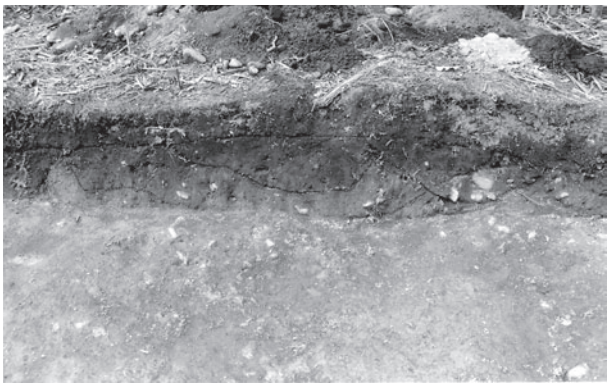
土器６・７出土状況　（北西から）

土器６・７出土状況　（南東から）

土器８出土状況　（南から）

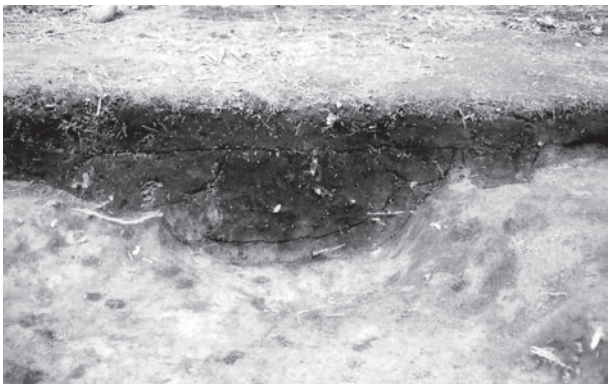
土器 13 出土状況　（西から）

写真図版８



ＳＸ 11 土層　（南壁）

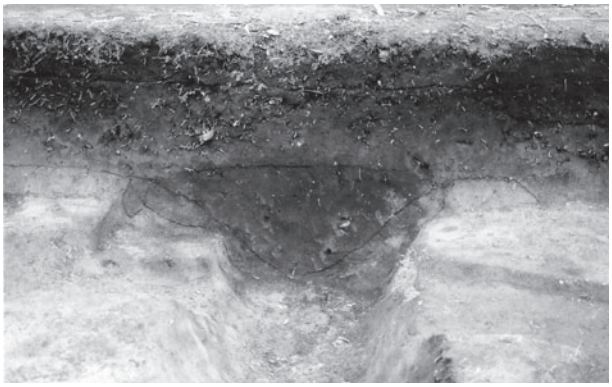
ＳＸ 11・12 土層　（南壁）



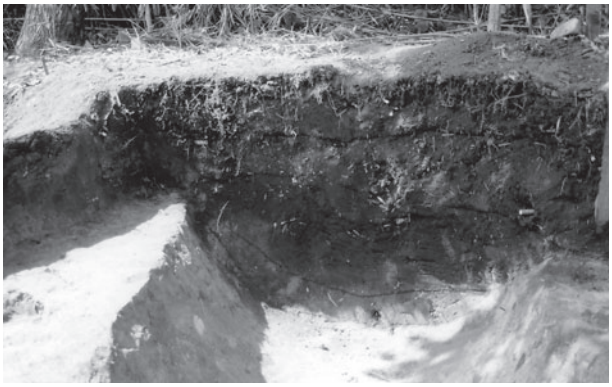
ＳＸ 12 東辺土層　（南壁）

ＳＸ 14 西辺土層　（南壁）

ＳＸ 14 東辺、ＳＸ 15 西辺土層　（南壁）



ＳＸ 16 西辺土層　（北壁）



ＳＸ 16 東辺土層　（北壁）

ＳＸ 16 ほか土層　（東壁拡張前）

5

6

7

8

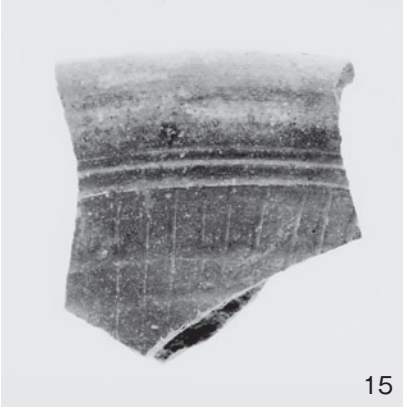
12

13

出土遺物（１）

9

22


15

26

28

20

23

24

18
19

出土遺物（２）

# 報　告　書　抄　録

| | |
|---|---|
| ふりがな | こたにえーいせき（だい２じ）はっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 小谷Ａ遺跡（第２次）発掘調査報告 |
| 副書名 | ―三重県松阪市嬉野天花寺町所在― |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | 三重県埋蔵文化財調査報告 |
| シリーズ番号 | ３１２ |
| 編著者名 | 西村美幸 |
| 編集機関 | 三重県埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川 503　Tel　0596（52）1732 |
| 発行年月日 | 西暦２０１０年　３月　３１日 |

| ふりがな<br>所収遺跡名 | ふりがな<br>所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| こたにえーいせき<br>小谷Ａ遺跡 | まつさかし<br>松阪市<br>うれしのてんげいじちょう<br>嬉野天花寺町 | 24204 | ｂ９１ | 34 度<br>38 分<br>37 秒 | 136 度<br>27 分<br>59 秒 | 20080630<br>～<br>20080825 | 389 ㎡ | 主要地方道松阪一志線道路改築事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 小谷Ａ遺跡 | 墓地 | 弥生・古墳・奈良・室町 | 方形周溝墓、溝、土坑 | 弥生土器・土師器・瓦<br>（総重量 21.0 kg） | |


要約

小谷Ａ遺跡は、天花寺丘陵北側の緩斜面に立地する遺跡である。調査の結果、弥生時代後期前半の方形周溝墓６基と、室町時代の溝、古墳時代・奈良時代の遺物を確認した。方形周溝墓は２基単位で直列状に配置している。天花寺丘陵上には弥生時代後期前半の集落があり、小谷Ａ遺跡はこの集落の墓域の可能性もある。

三重県埋蔵文化財調査報告　３１２

小谷Ａ遺跡（第２次）発掘調査報告
－三重県松阪市嬉野天花寺町所在－

２０１０（平成２２）年３月
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印刷　株式会社アイブレーン